

懷德堂繪圖屏風展示

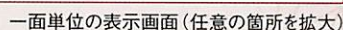
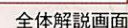
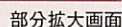
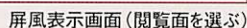
この電子展示では、この懷徳堂絵図屏風を一覧できるとともに、主要な図面を時代順に並べ替えて閲覧することもできます。デジタルコンテンツの特性を活かして、屏風を時代順に解体して再構成するわけです。

絵図面という平面資料から、懷徳堂の豊かな歴史を読み取っていただければ幸いです。

●絵図屏風解説—屏風を一面ずつ見るには



学舎の変遷— 図面を時代順に並べて見るには



懷徳堂絵図屏風解説



第一面

寛政年間に焼失する前の懷徳堂の図。標題は「大坂尼崎町一丁目学校類焼前之図」、上部欄外に「尼崎町一丁目学校表口十一間四尺五寸裏行二十間」と注記がある。抄写者は「桑名克一」。

この図が抄写された時期は未詳であるが、手がかりとなるのは「道明寺屋醤油倉」の有無である。もともと懷徳堂の敷地北側には、「道明寺屋醤油倉」があった。これは、懷徳堂の敷地を提供したのが五同志の一人道明寺屋であったことによる。ところが、この図には、その「醤油倉」のあった位置に「土蔵」「納屋」が設けられていることが分かる。従って、この図は、初期の懷徳堂が一部改築された時の図面で、表題にある通り、寛政四年（1792）に焼失する直前の図であったと推測される。

なお、この図は一階部分のみを記しているが、二階部分の図は屏風第二面下部右側に貼り付けられている。



第二面

初期懷徳堂の図。第四面の「大坂学校之図」（「天明二年（1782）十一月二十三日桑名克一書」）とほとんど同様の図で、下段左側に二階部分が貼付されている。



第三面

第一段と第二段に中井竹山手簡。その他は、第四面「大坂学校之図」の部分図。中段左の図は第四面図の二階部分。



第四面

上段に中井竹山宛書簡。図面は初期懷徳堂の図。上部に「大坂学校之図」の標題、下部に「天明二年（1782）十一月二十三日桑名克一書」の記載がある。欄外に「街 今橋筋尼崎町壹丁目、地東西十一間四尺五寸、南北二十間」「此図也以鐵尺二寸當一畝」の注記。敷地北側に「道明寺屋醤油倉」が確認できる。これは、懷徳堂の敷地を提供したのが五同志の一人道明寺屋であったことによる。

二階部分は屏風第三面中段左に貼り付けられており、二階全体について「中井二階之図」と注記されている。つまり、二階は、懷徳堂学主中井家の私的空間であったことを示す。



第五面

上段に中井竹山宛書簡。その下段にその返書（中井蕉園写）。その右に第四面「大坂学校之図」の一部変更図。その下も、同様の変更図。最下段に寛政六年（1794）設計図の添書。



第六面

寛政年間の再建設計図。上下二枚からなる。懷徳堂は、寛政四年（1792）、市中の大火で類焼した。そこで、当時の学主・中井竹山は寛政五年（1793）、幕府に二つの再設計案を提出した。上段の図は、もとの敷地を拡張し、中央に三十畳の「講堂」、南西に「教授宅」、北西に「聖廟」「祠堂」「土蔵」などを備えた壮大な案であり、幕府に提出されたという二つの計画の内の前者の案を示すものである。中井竹山写。この絵図は下段の図の下絵である。

下段の図も、前者の案の一つ。基本的には上段の図と同様であるが、「祠堂」が南向きに配置されている点などにやや相違がある。中井竹山写。

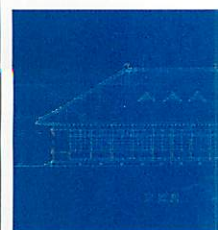
懷徳堂学舎の変遷（時代順による再配列解説—⑩⑪）



⑩幕末の懷徳堂（「旧懷徳堂平面図」）

懷徳堂で代々学主を務めた中井家の子孫・中井木菟麻呂（なかいづぐまろ）が幼時の記憶を基に記した「旧懷徳堂平面図」（『懷徳』第9号、1931年）。安政年間（1854～1859）から閉校（1869）に至る時期の懷徳堂を描いたもの。「寛政再建着工時における懷徳堂」に見えていた「池」が埋められ、書庫蔵が増設されているなどの部分的な増改築はあったようであるが、講堂など他の主要な構造物はそのまま、寛政八年（1796）に竣工した懷徳堂が、基本的には幕末までその姿を保持したことが分かる。

なお、この幕末の懷徳堂については、木菟麻呂の妹・中井終子が「安政以後の大坂学校」（『懷徳』第9号、1931年）として、その構造を詳細に説明している。





第七面

寛政年間の再建設計図。標題は「寛政五年(1793)癸丑八月 学校旧地面再建絵図」。中井竹山が幕府に提出した二つの計画の内の後者の案を示すもの。第六面の二つの図が敷地自体を拡大する案であったのに対して、この図は、類焼前の敷地の中に再建するという案で、「聖廟」や「教授宅」は見られない。「講堂」も三十畳から十五畳に縮小されている。標題の下は一部変更の図。



第八面

寛政六年(1794)の届書。



第九面

学校再建許可、大坂西町奉行所申し渡し書。寛政六年(1794)届出書など。



第十面

上段に、中井桐園の題字による「懷徳堂結構新旧図」という屏風十二面全体の標題。その下の図は、創立時の懷徳堂を描いたとされる「学校最旧絵図」。図面下部に「此街自東達西、呼曰尼崎一丁目」の記載がある。この図によれば享保九年(1724)創立時の懷徳堂は、北側の「講堂」、中間部の中庭、南側の「師室」から構成されていたことが分かる。

また、三段目には、元来この図面の左側に接続していたと思われる附記が、切り取って貼り付けられている。その記述によれば、「間口(東西)六間半、奥行(南北)十間、計百三十坪」。

なお、その右に貼り付けられているのは、懷徳堂「學」字瓦当の拓本である。



第十一面

上段に「大阪府学五舎之銘」(中井碩果)。その下に、第七面の寛政五年(1793)再建設計図と同様の図面。他の図面に比べると極めて簡略な図で、言わばラフスケッチといった描かれ方をしている。ただ「講堂」が「二十畳」と記載されているので、第七面(講堂は十五畳)の図を単にラフに書いたものというよりは、第七面の図の案に落ち着く前の下絵であったという可能性も考えられる。全体の構造は、基本的には第七面の図と同様であるが、「祠堂」が東向きである点がやや異なる。



第十二面

寛政年間再建着工図の最終図面。中井竹山により「寛政七年乙卯(1795)七月六 官命を受候 学校再建同八月十日新始」と記載されている。南の正門を入れて左手(南西)に「庭」。「講堂」は第七面の寛政五年(1793)再建設計図と同じく十五畳。学舎北西の隅に、東向きの「祠堂」、中央右側(西)には「池」が見える。この池は、その後、埋められ、書庫蔵が増設された。但し、基本的には、寛政八年(1796)に竣工したこの懷徳堂学舎は、明治二年(1869)の閉校まで大きく変更されることはなかった。

①重建懷徳堂(重建懷徳堂設計図・平面図・玄関写真)

江戸時代の懷徳堂は明治2年(1869)に閉校するが、それから約40年の後、懷徳堂の復興運動が盛り上がり、懷徳堂の再建が決定する。明治43年(1910)1月、大阪人文会の席上、西村天因は五井蘭洲伝を講演、懷徳堂記念会の発足が決議された。

さっそく精力的な顕彰活動が開始され、大正4年(1915)には重建懷徳堂の設計図が完成して8月に着工、翌年(1916)9月に竣工した。これによれば、重建懷徳堂は、東区豊後町19番地(現・中央区本町橋)の東横堀川に面した公道に西向きに配置され、公道から門を入り、車寄せ、講堂、その左側(北)に別棟の事務所があったことが分かる。

図面の数値は尺貫法で記入されており、講堂床図面の数値「54.0(9間)×85.5(14間25)」によれば、縦26メートル×横16.4メートル、床面積425㎡(126坪)となる。その内、建物の大半を占める「大講堂」は、玄関・車寄せから廊下を通った奥(東)に配置されており、「五拾八坪五合」、その廊下を挟む二つの「小講堂」はそれぞれ「十七坪五合」と記載されている。大講堂の奥(東)の両側の空間は、この設計図面では、各々「講師溜 八坪」「(内) 玄関 土間」となっているが、後にこれらは「素読室」「物置」に改造された。

また別棟の「事務所」は2階建てで床面積は「四間」×「三間半」(14坪)。1階が「受付」「小使室」など、2階が「会議室」となっている。

絵図面で見える懷徳堂の歴史 懷徳堂絵図屏風展示

- ①創立時の懷徳堂
(第十面)
- ②初期懷徳堂
(第四面および第三面)
- ③初期懷徳堂
(第二面)
- ④寛政焼失前の懷徳堂
(第一面および第二面)
- ⑤寛政再建設計図における懷徳堂(1-1)
(第六面上段)
- ⑥寛政再建設計図における懷徳堂(1-2)
(第六面下段)
- ⑦寛政再建設計図における懷徳堂(2-1)
(第七面)
- ⑧寛政再建設計図における懷徳堂(2-2)
(第十一面)
- ⑨寛政再建着工時における懷徳堂
(第十二面)
- ⑩幕末の懷徳堂
(「旧懷徳堂平面図」)
- ⑪重建懷徳堂
(重建懷徳堂設計図・平面図・玄関写真)
- ⑫書庫・研究室棟増設後の重建懷徳堂
(重建懷徳堂復元模型、書庫・研究室棟写真)

懷徳堂 絵図屏風展示

懷徳堂学舎の変遷

関係年表

年	事件
1724	懷徳堂学舎の遷移
1782	懷徳堂全焼
1792	懷徳堂再設計図
1793	懷徳堂改修着工
1795	懷徳堂改修竣工
1796	懷徳堂改修竣工
1869	懷徳堂閉校
1916	重建懷徳堂竣工
1926	書庫・研究室棟増設

懷徳堂絵図屏風は全十二面からなる。第十面に、中井和國の設計により「懷徳堂結構和洋図」と記されている。これが屏風全体の標題である。この屏風は、創立以後、何度か改訂されて懷徳堂の姿を写し留めたものである。主な図面は4枚ある。ただし、これは第一面から順次より時代順に並べられてはいない。そこで、このコンテンツでは、主題面を時代順に再配列し、各図面に(1)～(9)の番号を付けて解説する。

また、この屏風には貼られていないが、幕末の懷徳堂を描いた図面を添えて、さらに、大正時代に再建された重建懷徳堂に関する資料を(11)(12)として附録する。

初期懷徳堂時代 再建懷徳堂時代 重建懷徳堂時代

前のページへもどる

懷徳堂学舎の変遷と図面紹介画面



部分拡大画面



図面表示と解説画面

屏風各面・各図面の詳しい解説は、それぞれの画面の下部に表示されます。
参考：湯浅邦弘「懷徳堂の祭祀空間—中国古礼の受容と展開—」
〔大阪大学大学院文学研究科紀要〕、第46巻、2006年
〔附属図書館研究開発室員・文学研究科教授 湯浅邦弘〕